

# わが心のふるさと 良寛

平田 美知子

## 1 プロローグ

狂おしいまでに良寛を追ったのは、10数年以上前にさかのぼる『道元の読み方』を読んでからだったと記憶している。

鎌倉時代は、多くの仏教指導者が輩出した時期であり、法然、親鸞、栄西、一遍、日蓮、などの名前が頭に浮かんでくる。

府中市役所の社会教育課、同和対策課に勤務していた頃、部落解放運動ははなばなしく理論構築が進められていた。とくに宗教に関しては緻密で精巧な理論が求められていたように思う。

それというのも、宗教界で多くの差別事件が発生し、それに対処すべく、運動体ではより強い団結力と理論をもって、その解決に当たる必要があったのことがあったからだ。

当時、宗教界では、浄土真宗、真言宗そして曹洞宗でも僧侶らによる差別事件が引き起こされていた。部落解放同盟広島県連合会では、それに立ち向かうための理論学習がなされた。浄土真宗とは、差別事件を機に同朋三者懇話会（安芸教区、備後教区、広島県連）が開催されることになった。この同朋三者懇話会では、「業・宿業論」「煩惱論」「真俗二諦論」「信心の社会性」「往生・本願論」など、人間の内面の複雑な構造からくる弱さにより、差別心が生まれることを、宗祖の教えからお互いに分析していく研究会が開催された。この会は、もう20数年間も続いている。

このようなことなどを機に、私自身の日常も、自ずと宗教に関心が向くようになっていった。私も行政の一員として、糾弾学習会に参加して行ける立場にあったため、荒削りではあるが、經典の端をかじる程度のこと、出来る位置づけにあったことは幸いであった。

糾弾学習会の時など、宗門に投げかけられる質問に、自分ならばどう答えるかと常々思量していた。ドキドキしながら糾弾学習会に臨んでいた記憶がよみがえる。その繰り返しは、いたらないながらも、「自己を見つめる」「己自身を振り返る」訓練になっていったように思う。

『道元の読み方』を目にしたのは、やはり曹洞宗の糾弾会が行われていた頃のことだと思いが、著者の栗田勇氏はフランス文学を専攻した詩人であることも手伝って、この書の前に「一遍」を執筆し、後に「良寛」も書いている人で、高僧の有名

な言葉群を、キラキラと輝く詩的な言葉で表現し魅了して、吸い込まれるように読み進んだ覚えがある [栗田、1984：271]。

そしてこの『道元の読み方』の最終章で、私は良寛との決定的な出逢いとなったわけである。

良寛は、玉島の円通寺で修行していたころ、国仙和尚から『正法眼蔵』を見せてもらった。道元の語録を見ると余りにも素晴らしいものであったので、こんなに素晴らしいものを、今では誰も読もうとしないことが惜げなく、涙が止まらなかったというのだ。

これが良寛の書いた、「永平録を読む」という詩である。良寛の生きていた頃、道元の『正法眼蔵』は、永平寺の記録を示したものとして『永平録』と呼ばれていた。良寛は、今ではこの素晴らしい本を読もうとする人が一人もいなくなったと嘆き、涙が止まらなかった、という内容の詩を書いている。

隣の老人が良寛を訪ねて来て、「この本はどうしてこんなに濡れているのですか?」と尋ねる。良寛は、涙で濡れたのだとは言い難く、「夜来の雨で濡れてしまったのです」と答えたという。

私にとって、良寛という人が若い頃、こんなに近く玉島で修行なさったのだということへの驚きと関心がまず先であったが、栗田勇氏がこの書の最後で結ぶ、「君看双眸色 不語似無憂」（君みよや双眸の色 語らざれば憂いなきに似たり）の良寛の好んだ言葉は、何よりも心を惹き付けてやまないものであった。それと同時に、子どもたちと楽しそうに手毬をついたり、鬼ごっこをして遊んだ良寛さんが、こんなに素晴らしく心に響く漢詩を好んだということも、初めて知ったのである。（あの良寛さんが、こんなにも哀愁に満ちた言葉を残しておられるとは…）

栗田勇氏は、この「君看双眸色 不語似無憂」を、次のように解説している。

これは良寛がしばしば好んで書いた言葉です。黙っていると何も苦しみがないように見えるけれど、実はそこに無限の苦しみが含まれている。

これは故事来歴があります。ともに憂いと苦しみを持つ人なればこそ、めぐり逢った時に、はたと心と心を通じるというのです。互いに憂えている人間が会った時、ただただ眼の色を見てくれ。何も言うな。「語らざれば、憂いなきに似たり」、語らないからこそ憂いがある。語れないほどの憂いがある。友よ、眸と眸で互に見つめようという訳です [栗田、1984：271]。

そんなわけで私は、玉島の円通寺へはたびたび足を運んだ。良寛さんの息づかいを感じたいからだった。もちろん新潟にも訪ねた。

それからというもの、『良寛と仏道』[橘、1981]をはじめとして、良寛に関するあらゆる書を求めたのである。わが家のリビングには、良寛と貞心尼が囲炉裏に對坐して語り合っている安田鞞彦画伯の額が掛るほどになった。

時期を同じくして、私は「コスモス短歌会」の会員でもあった。月刊誌で会員の短歌が掲載される『コスモス』[宮、1993：7-8]という冊子に、新潟の橘芳園と

言う方のものがあつた。私は、毎月その方の短歌を心待ちにするようになっていた。仏教に関する短歌をよく詠んでおられたし、僧侶であり教員であることもそれらの短歌で分かつた。ものごとを深く考えておられる方だなどという程度の関心をもつていた。橘芳園氏のお父上が橘馨氏であるということも分かつてきた。実は、『良寛と伝道』の書に関わつておられる方だつたのだ。

その頃の橘芳園氏の短歌に次のようなものがあつた。

- ・教師にて僧侶のわれは僧ならず俗ならずと宣る親鸞に似る
- ・閉眼せば遺骸は魚に与へよと遺言したり愚禿親鸞
- ・心善くて殺さずにあらず縁なくて殺さぬのみと親鸞言へり
- ・親鸞に抱るよりなきに真宗のわが宗門も二派に争ふ [宮、1993：7-8]

橘馨氏は、浄土真宗の僧侶でありながら、自坊の林正寺境内には「良寛地藏尊」を安置されているという。後にも述べたいと思うが、良寛は、曹洞宗の僧でありながら、死んでからは浄土真宗のお寺で供養されている。これは良寛が老いてお世話になった木村家が、浄土真宗の門徒であつたこともあるが、それほどに新潟では宗門を問はず、良寛を敬愛しているということなのだろう。

このようなご縁によって私は、ますます良寛に魅かれていくことになる。

当時、部落解放同盟書記長の小森龍邦氏の著書『ところ・文学・宗教』[小森、1986：95-96]の中でも、仏教界がさまざまな差別事件を起こしているけれども、それらが契機になって、差別戒名などにみられるような仏教界の差別体質が明らかになってきたこと。解放運動の先頭に立つ自分は、宗教をもう少し深く研究していかなければならないと、宗教に対する思いを述べている。「若き日の宗教に対する思いが、いっきよに集約されなければならない状況に直面したと言っても過言ではなからう」[小森、op. cit.：95-96]と決意とも言える言葉が書かれている。

当時、私の立っている立場からしても、当然ながらその進むべき道筋の歯車にガッチリと組み込まれて、自分の立場にあつて何ができるかを考えて行きたいと思うようになっていた。そして、この運動こそが人間として生きる意味を問えるものだ、という確信のようなものがみえてきた時期でもあつた。

もう一つ、良寛は多くの和歌や漢詩を残している。とくに、女弟子の貞心尼との歌のやり取り（贈答歌）は、良寛没後4年目に『蓮の露』として、貞心尼自らがまとめたものといわれている。良寛に関わる多くの書を求めたのも、それらに対するあこがれのようなものに駆り立てられたがゆえだつたと、懐かしく思い起こすのである。もう14、5年も前のことだ。

## 2 良寛のおいたち

やまかげの岩間をつたふ苔水のかすかに我はすみわたるかも

この境地に至るまでに昇華しきった良寛は、おいたちから74歳に亡くなるまでに、どのような心の遍歴を経てきたのであろうか。

良寛は、1758（宝暦8）年、出雲崎の名主・橘屋の山本以南の長男として生まれた。幼名を栄蔵といった。少年時代は、大森子陽の塾に入り漢詩を学ぶ学問好きの子どもであった。

小さい頃から、ひょうきんともいえるエピソードが残っているが、それが、大人になっても子どもたちと毬つきや鬼ごっこをして遊ぶ乞食僧に結びつくのは、必然であったろうと想像できる。

たとえば少年の頃、朝寝坊をして父・以南にしかられた栄蔵は、上目使いに父親をにらんだそうだ。その栄蔵を父親は、そんな顔をして親をにらむ者は、カレイになるぞ、と叱った。栄蔵は、それが本当かどうか確かめるために、海に走り出てカレイになるかどうか、夕暮れになるまで一人ぼんやり岩の上に立って待っていたという。

これに似たエピソードは、良寛が大人になっても幾つも残っている。

のみしらみ音に鳴く秋の虫ならばわがふところは武蔵野の原

良寛は、のみやしらみのような害虫にさえ親しみをもち、自分の懐を武蔵野の原として遊びなさい、と詠う。突き詰めていけば、曹洞宗宗祖・道元の「一切衆生、悉有が仏性」（『涅槃経』）と、「悉有」は即「仏性」と読んだ考え方に通ずるものだ。この世に存在するすべてのものが、仏性であるというのだ。「のみ」「しらみ」までが仏性であるから、わがふところを武蔵野の原として遊べよと、おおらかに謳い上げる。まさに曹洞宗・道元の真髄であると言える。

良寛は、五合庵で日向ぼっこをしながら、自分の体にくっついている「のみ」や「しらみ」を縁側につまんで出しては、いっしょに日向ぼっこをする。それが済むと、また1匹ずつ自分のふところの中に入れてやり、自分の血を吸わせて育ててやる。そこまでの愛情をもって「悉有」に対していたというエピソードまで残っている。どこまでもこれは言い伝えでありエピソードであるが、宗祖・道元を信奉する良寛は、ここまでの宗教的境地を兼ね備えた人だったのだということが言いたかったのであろう。

名主の長男として生まれた良寛ではあったが、学問をし、詩歌に親しむことには秀でていても、家を継ぐための名主見習の職は、権力と民衆の間で苦しみ、十分に役職を果たすことができなかった。真実を貫いて生きるべきか、両者の間に立って、要領よくものごとを処理すべきか、良寛にはそれすら考えるすべもなかったのであろう。耐え切れなくなって、とうとう良寛は家を出てしまい、隣町の禅宗光照寺で剃髪をしてしまう。

良寛には、6人のきょうだいがあるが、一門みなが歌道に秀でていたという。これは、一途に父母の影響であったということだ。

母・秀子は、佐渡相川の回船問屋から、17歳の時養女として、出雲崎の山本家

へ来た。また母の二人の妹は、真言宗の尼僧になっている。家庭的にも宗教的雰囲気の中で育ったであろうことは、容易に想像のつくところである。良寛の7人きょうだいの中、4人までが僧尼となっていることから、彼がとった行動は少しも不自然ではないことがうかがえる。また歌についても、豪商の子女であるわけだから、教養のためにいくらかは学んだであろうが、母の歌も残されていることを思えば、相当なものであったと考えられる。

また良寛は、西行にも大いに影響を受けているようだ。西行が、越後を訪れているという場所があちこち残っているが、意識的に良寛もそのあとを追った形跡がある。

そのような訳で、弟の由之が家を継ぎ、後に、父の以南は京都の桂川で投身自殺をしてしまう。これらの出来事の裏には、大きく移り変わろうとしていた社会経済構造があったのではないだろうか。

栗田勇氏が『良寛入門』の中でふれている、「さらにもう一つ悩まして」いたことは、出雲崎に代わってしだいに繁栄の度を増していた隣町・尼瀬の名主、京屋との争いの激化である[栗田、1985：61]とあるように、入港する船が時代とともにだんだん大きくなっていくに連れて、尼瀬の港の方が深いので、船の受け入れがたやすくできるようになった。反対に出雲崎の港は次第にさびれていくという中で、以南の中にも経済的な悩みが徐々に大きくなっていった。

良寛と同じように文学肌の父・以南には、そこを乗り越える精神的な活力は湧いて来なかったというべきか。私のこの論考の中では、その歴史的背景や社会経済的背景については、あまり詳しくはふれない。

また瀬戸内寂聴師は、『良寛の魅力を語る』[新潟良寛会、1993：90-92]の中で、面白いことを言っている。自分は51歳の時に出家したが、自分が死んで後の世の人々が「瀬戸内さんはなぜ51歳で出家したのか？」と探しても、分からないだろう。なぜなら自分自身にも分からないからだ、という意味のことを言っている。確かにそうだ。これだという決め手のものは見つからないだろう。しかし、幾つかの要因があって人は行動を起こす。縁があって果が生ずるわけであるが、それでも、良寛の出家も決定的な理由ははっきりしないというところだろう。

そういうことで、私はこの論考を、できるだけ良寛の和歌や詩、また貞心尼との心の交流のあたりに焦点を置いて書き進めたいと思っている。

### 3 慈悲深き人

いかなるが苦しきものと問ふならば人をへだつる心と答へよ

良寛の歌に、このようなものがある。

世の中で苦しいことと言えばどんなことかと問えば、人を「へだつる」(差別する)心が一番苦しいことである、と良寛は詠う。「良寛さん」と言えば、すぐに浮かんでくるのは、子どもたちと手毬をつき、かくれんぼをして遊ぶ姿であることにはす

でにふれた。しかし誰にでもわかるこの行動の稚拙さの中に、仏の教えそのままが内蔵しているということには、多くの人は気づいてはいない。乞食坊主と言われながら、子どもたちは無論、下層の民、遊郭の遊女や禿（かむろ）たちにまでにも親しまれた僧であった。

後にも述べたいと思うが、『蓮の露』を編纂し、良寛の最期を看取ったと言われる女弟子・貞心尼にはじめて贈った歌に、次のようなものがある。

つきてみよひふみよいむなやここのとをととおさめてまたはじまるを

手毬をついてみなさい。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十とつき終われば、また一、二、三と始まるでしょ。このように仏の教えは、どこまでも際限のないものなのですと、良寛は歌で尼僧を優しく論ず。どんなに甘い言葉よりも、この歌は貞心尼の心を大きく揺さぶったに違いない。尊敬してやまない良寛和尚から、こんなにも素晴らしい歌が届いたのであるから。

良寛は、教養のほとばしる貞心尼も、遊郭の遊女も同じように慈しむ。また村の子どもたちと楽しく遊ぶように、遊郭の禿（遊女の傍にいて見習いをする幼女）たちを可愛がり、差別をしなかった。

子どもらと手毬つきつつ此の里に遊ぶ春日は暮れずともよし

良寛は、素直に自然の中に入ってゆき、子どもらも自然と一体化している様子が、やわらかく優しい詠い口の中に現われている。

また、寛政、文化時代には越後地方に天然痘が流行し、多くの子どもが死亡した記録が残されているが、昔は子どもの死亡率が大変高かった。普通の家庭の墓地を見ても、小さな河原石だけを並べた墓がたくさんある。

良寛には妻も子どももなかった。また両親の臨終にも立ち会えなかった悲しみは、いつまでもつらい思い出として、心の中に残っていただろう。良寛は、「去年は痲瘡にて子共さわに失せにたりけり 世の中の親の心に代わりて読める」と、詞書きに記した歌を残している。

春されば木々の梢に花は咲けどももみぢ葉の過ぎにし子等は帰らざりけり

人の子の遊ぶを見ればにはざずみ流るる涙止めかねつも

良寛は、いっしょに遊んでいた亡くなった子等を、わが子のように慈しみ、その子等の親の悲しみをわがことのように悲しんだ。すべてをわが身に引き取り、感受せずにはおれない、本来慈悲の人であったと言えるであろう。

#### 4 「われ、何する者ぞ」

良寛がつねに持ち歩くものの中に、手毬とおはじきがあった。子どもらと果てしなく手毬をつくことは、どこまでもこちよい緊張が続き、無我の境地へ誘うリズムの中にわが身を置く、言うなれば修行の一つでもあったのではなかろうか。

良寛にとっては、困難な修行や座禅をしなくても、毬つきをすることは、おのずと無我の境地にいられるわけで、おはじきも集中力の養われる遊びである。子どもたちは、良寛と一体になって遊びに興じたのであろう。これが道元禅師のいう、「身心脱落」を意味するものではなかったのか。これが名主の長男として生まれたにもかかわらず、家を出て、世を捨て、寺をも出た良寛の姿であったのだ。

そして70歳で、40歳も年の差のある貞心尼と恋におちた。こういう表現が適しているのかどうか分からないが、二人は、かすかな恥じらいと深い想いを含む相聞の歌を交わし合っている。良寛は、長い孤独で苦しい生涯の最後にやっと満ち足りた瞬間があった。彼を研究する人たちも、貞心尼との関係には、ホッと一息するのではなかろうか。そしてその関係は、プラトニックであったとかなかったとか、弟子と師匠の関係以外のなにもでもなかったとか、後世の人たちは、興味深く議論している。

かつて私は、良寛さんに逢いたくて新潟まで5、6人の旅に出たことがある。私たちが泊まった民宿でも、夕食の時この話でもちきりになり、なかなか結論は出なかった。宿の女将さんに意見を聞くと、「作家の紀野一義さんも、ここにお泊りになりそのことについて尋ねられたことがあります。そんなことどちらでもいいじゃあないですか。良寛さんと貞心さんは、とても素晴らしいご関係にあったんですよ。私はそれでいいと思うんです」とすごい迫力で言葉が返ってきた。私たちは何も返す言葉がなかったが、それにしてもどうだったのか、興味深々のままで口をつぐんだものだった。

越後の人たちにとっては、やはり敬愛する二人のままでもいいのかも知れない。しかし、やはり良寛は孤独の人だった。

孤峰 独宿の夜  
 雨雪 思い悄然たり  
 玄猿 山椒に響き  
 冷潤 潺湲を閉す  
 窓前 燈火凝り  
 牀頭 硯水乾く

の漢詩を見ても、重くせつない寂しさが伝わる。

山の中の庵に独り寝る夜は、雨交じりの雪が降り、思いは悄然としている。山には猿の鳴き声だけが響いているが、谷間のせせらぎの音もない。窓には灯も揺れず、寝台の側の、硯の水も乾いてしまった、と詠う。孤独でこの上なく愁いが漂う。ここに至って、良寛の神髄を見たような気がする。

曹洞宗の宗祖・道元（1200—1253）が宋に渡り、天童山に修行した時のことである。当時の宋は、北方の遊牧民の侵入に脅かされ、政治的危機に瀕していた（南宋の政府は、5つの寺を設定していて、天童山はその一つであった）。

天童山の禅宗は、生活の様式を厳しく整えることが目的であり、当時の日本の禅宗の、加持祈祷や護摩を焚いたり念仏を称える修行とは、随分かけ離れたものであった。道元は、その天童山のありように魅かれたのだった。

天童山での道元の有名な体験がある。道元はその時のことを、『典座教訓』の中で紹介している（「典座」とは、禅宗で食事の用意など、生活すべての用をする役目の僧のことをいう）。

ある夏の日、道元は庭で椎茸を干している老典座を見かけた。手に竹の杖を持ち、頭には笠もかぶらない。暑い太陽が照りつけるなか、瓦を敷いてある地面は焼けついている。典座の顔には汗が流れ、背骨は弓のように曲がり、眉は鶴に似て真白である。

道元が典座に歳を尋ねると、68歳だという。道元が、「あなたのようなお年寄りが、そんな苦しい作業をどうしてするのですか。もっと若い人がいるでしょう」と言うと、典座は「他はこれ吾にあらず」と答えた。つまり、「他人がやったのでは、私がやったことにはならないでしょ」と言うのである。自分がやるからこそ意味のあることだという意味で答えたのだ。

次に道元は、「けれども、こんなに暑い時にしなくても、もう少し涼しくなったらやればいいではないですか」と言うと、「更に何れの時をか待つべき」と、「もっといい時を待っていても、いったいそんないい時がいつくるだろうか」と、やるなら今のこの時しかないのだということを使った。

悟りを開くのに、他人にやらせることはない。そして楽な時を選ぶなどとはもってのほかだ、ということだ。道元は、感動した。力強い自覚と教訓を覚えた。「更に何れの時をか待つべき」「他はこれ吾にあらず」とは、ものすごい自覚なのである。良寛もこれと同じような経験をしている。

## 5 円通寺時代の良寛

良寛が、玉島の円通寺で、国仙和尚のもと修行をしていた頃のことである（良寛は、ここで10年間を過ごした）。

円通寺は、瀬戸内の海を見下ろす小高い丘の上にある。私は何度も、この円通寺を訪れたが、天気の良い日には、遠く四国の連山がかすんで見える。今は公園となり、元の僧堂が良寛堂として残されている。

良寛はここで、道元が宋で経験したような、厳しい修行を積んだのだった。厳格で、規則正しい日々の生活であったに違いない。玉島での良寛は、座禅修行と托鉢を日課としていた。国仙和尚から『正法眼蔵』を借りて、夢中で読んだのもこの頃だ。彼が、円通寺での生活を振り返った詩が残されている。

円通寺に来たってより



幾度か 冬春を経る  
 門前千家の邑  
 更に一人を知らず  
 衣垢づけば手自ら洗い  
 食尽くれれば 城闕じょうけつを出ず  
 かつて高僧伝かうそうでんを読むに  
 僧は清貧せいへいに可なるべし

ひたすら修行に励み、一人として知人のいない遠い地で孤独の中、僧となる道を歩んでいる若き青年の姿が浮かぶ。

円通寺に来てから、何年かが過ぎ去った。多くの家が並んでいても、一人として親しい人はいない。衣に垢がつけば自分で洗濯をし、食べ物が無くなれば、托鉢に出ていく。かつて高僧伝かうそうでんを読むと、僧は清貧であるほうが良いと書いてあった、と言うほどの意味であろう。理想を追い、立派な僧になるべく励んだであろうことが伺える。

また、良寛の10年近い円通寺での修行の中で、仙桂という和尚のことを詠った詩がある。

仙桂和尚は真の道者  
 貌は古にして言は朴なる客  
 三十年 国仙の会に在り  
 参禅せず 読経よきんせず  
 宗文の一句を 道みちわず  
 園采いんさいを作つて 大衆を供養す  
 当時 我 之を見れども見ず  
 之に遇い 之に遇うも 遇あわず  
 吁嗟あゝ 今 之ならに倣ならわんとするも得べからず  
 仙桂和尚は真の道者

仙桂和尚は古風な人である。30年国仙和尚のもとにあって、言葉も朴訥であり、座禅もしないし、経も読まず、悟りについても一言も言わない。ひたすら菜園を作つて、みんなの食事を作る。当時、自分は彼を見ても彼が理解できなかった。彼に会つても、彼に会つたということにも気がつかなかつた。あゝ、けれども今になって、彼の生き方に気づいて習おうと思つても、もうとてもまねができない。仙桂和尚はじつに素晴らしい道者であつたことよ、と。

道元が、宋で出会つた老典座の行為に学んだように、良寛も円通寺でこの仙桂和尚の行動に、後になって大きな感動を覚えている。そこに、黙々と雑用をしている、薄汚れた老僧には目もくれなかつた自分を恥じ、後悔している良寛がいる。

国仙和尚は、「一に石を曳き、二に土を搬はこぶ」ことが第一義であり、座禅でも経

典を習うことでもないんだよ、と言ったという。

こうして良寛は、道元の『典座教訓』を読み、「他は是れ吾にあらず」「更にいずれの時をか待たん」の境地を目標として修行することができたということだろう。そして、仙桂和尚の黙々と菜園を耕す姿を思い出すことによって、自らを深く掘り下げているのだ。

また水上勉の『良寛を歩く』[水上、1986a]には、円通寺での良寛を「目立つような弟子ではなかったようだ。良寛には苦労もあったようだが、どちらかというところと風変わりなところがあつたようだ」[水上、op.cit.：96、110-114]と、住職の話を書いて書かれている。晩年、子どもたちと手毬について遊ぶ姿を彷彿とさせないでもない。

良寛が生きた時代、1758（宝暦8）年から1831（天保2）年頃は、幕藩体制にひずみが生じ、いたる所に騒動が起きていた。飢饉は何年も続き、地震は起きるなど大変な時代であった。そのような時代であったからこそ、子どもたちに少しでも心の安らぎを、と思つての良寛の行動であつたのかも知れない。

わが家は昨年、1744（寛保4）年からの墓石を整理する機会があつた。死亡の年代順に並べ替えたメモを作つていたので合わせてそれを開いてみると、やはり「童女」「孩子」「孩女」など小さくて死んだ子どもの墓石が多いことに気づく。ここからも、越後のみならず、日本中を震撼とさせた暗い時代であつたことが立証される。

また、私は何度も円通寺を訪ねたが、国仙和尚や仙桂和尚の墓が見当たらなかつた。『良寛を歩く』の中で水上勉は、寺墓とは離れたところにあると書いている。そして驚いたことには、「草男草女」「畜男畜女」などと彫られた差別墓石が円通寺の末寺の墓地に移されているということだ。

かつて国仙和尚は、良寛に1本の杖を与えて、自由な旅に出ることを進めた。この円通寺は、備中曹洞禅の道場としての地位が高く、ここの住職を務めた僧は、代々永平寺に栄進して、高い地位に昇る人が多かつた。

しかし国仙和尚から見て良寛は、とてもそんな道に進む弟子ではないことが分かつていたのであろう。せめて自分が生きている間に、自由な身にしてやりたいとの思いから、「大愚」と言う称号と杖を与えたのだ。国仙和尚は、この寺で亡くなつたが、円通寺に墓はなく、玉島の他の寺に眠っている。

円通寺の末寺に移された差別墓石には、「貞春畜女子」「養清畜士」などの差別文字が刻まれていると書かれているが、なぜ他の寺に移されたのであろうか。ただ白布にくるまれて、放置されていたようだ。

円通寺のように観光客の多いお寺であると、人目につくからとすることであろうか。全国的に仏教界で、差別墓石のことが問題になり、部落解放運動の側から指摘があつたからなのだろうか。それとも、指摘があつてはならないからと、宗門のほうで自主的に行つたことなのだろうか。

かつて、山陰のほうに差別戒名、差別墓石の研修会に行つたことがあるが、そこのお寺では、差別墓石を一所に集めて、差別戒名の見えないように墓石を積み、僧

侶や運動体の人たちで、供養をしたと言っておられた。円通寺の末寺の扱いは、あまりにもお粗末すぎるのではないかと思う。

傷心した様子の上水勉氏が、差別墓石を覗き込むように見ている写真が『良寛を歩く』の中に載せられているのが異様に見え、悲しい。

道元は、天皇から紫の衣を贈られたが、受け取らなかったと言われるほどに、権力に媚を売らなかった人である。国仙和尚の墓石のこと、差別墓石のことなど、何か背景にあるような気がしてならない。

## 6 良寛、故郷に帰る

こうして良寛は、放浪の旅を終え、ふたたび越後に帰った。良寛39の歳であった。

来てみればわがふるさは荒れにけりにわもまがきも落ち葉のみして

実家を飛び出して由之という弟にあとをゆずったけれども、帰ってみると橘屋は没落してしまっていた。17年ぶりの故郷、わが家を見て、良寛の思いはいかほどだったであろうか。胸の詰まる思いがする。

何ゆえに家を出しとをりふしは心にはじよすみぞめの袖

帰ってきた良寛は、没落してしまった実家をどんな思いで見たのであろう。どうして家を出てしまったのだろうか。良寛は、僧侶にはなったが、墨染めの衣の自分の心をおりふしに恥じている、と振り返る。

良寛は、由之夫婦が迎えに来ても帰らなかったという。そして差し入れは、入り用分だけもらって、後は返した。裕福でもない弟が、それでも兄の生活ぶりを見て知らないふりはできなくて訪ねて来てくれたのであろうが、良寛も実家を出て来た時の事情がある。自らの生きざまを身をもって実践するしかなかったのであろう。それも、はっきりとは表面に出してはいない。

信濃川の氾濫で被害を被った百姓のことを思うと、托鉢に歩くのも、つらく心苦しく思ったに違いない。

良寛は、その頃の世相を次のようにみている。

世上の栄枯は雲の変態  
五十余年は一夢の中  
疏雨 蕭々たり 草庵の夜  
閑かに衲衣を擁し 虚窓に倚る

世の中の栄枯盛衰は、雲の形が変わるようなもので、どうにでも変化する。私の五十余年の人生は、まるで一夜の夢のようであった。雨の降る草庵の夜は、ひそかに衣に身を包んで、虚しい部屋の片隅で窓のそばに佇んでいるばかりである、と言

う意味だろうか。

じつに透徹した心情で、世の中を観ている。少々どうであろうと、そんなことは世の常。一喜一憂することではない。良寛は、大自然のなせる技に逆らうようなことはしない。成すにまかすという「自然（じねん）」の境地に立っている。状況を諦らかに見る、宗教的に高い見地にあったと言えるだろう。

乙子神社でも同じような生活であったようだ。万葉集を学び、読書と詩作の日々を過ごしていた。ある日、長岡藩主・秋野忠清が、この乙子神社に立ち寄った時の話は有名である。

良寛の生活が、想像以上に厳しいものであることを知った藩主は、どこか生活のしやすい所に移ることを勧めようと思った。しかし良寛は、黙って静かに、

たくだけは風がもてくる落ち葉かな

とだけ書いて、藩主に渡したという。私は何も不憫な生活はしていませんよ。何もせこせこしなくても、炊くだけくらいの落ち葉は、風が持ってきてくれますよ、ということだ。藩主が立ち寄るということだから、良寛の生きざまはもちろんのこと、書や詩歌は当時から相当な、価値あるものとして人々に認められていたということだろう。

木村家の薪小屋に移った良寛は、食事は作ってもらえるから不自由はなかったであろうが、孤独でも自由な境地で過ごした国上での生活は、こうなってみると、なつかしいものだったのではなからうか。木村家や隣人から気を使われると、何日も庵に帰って来なかったという。

帰郷してもあちこちに移動し、住み家を定めなかったが、国上の五合庵にはいちばん長く住んだといわれる。6畳ほどの1室の庵は、杉木立の暗い山の中腹にあった。良寛が、20年もの間住んだといわれる庵である。ここは今も昔も変わらないたたずまいのように思われる。木の陰から今にも良寛さんが、ひょっこりと現れそうな雰囲気である。

狭い濡れ縁があり、簡素そのものである。こんな山奥に訪ねる人もまれであっただろう。ことに真冬の雪深い越後の山奥に、いつ来るともしれない人を待つ。良寛は、人恋しくなれば里に下りて托鉢をしたのだろう。長い冬は、さぞかし厳しかったであろう。

彼の詩は、壁に数枚の偈が貼りつけられているだけである。釜は長く使わないので塵がたまっている。時々、東のほうに住む老人が月夜に訪ねてきてくれるだけである。窓の前にそびえる芭蕉の木が高く伸びているので、終日その下に座って歌を詠み詩を作っている、という詩があるが、まさにそうであったろう。

良寛は、59歳まで五合庵で孤独な生活をした。

世の中に交らぬとはあらねどもひとりあそびぞわれはまされる

良寛の詩歌の中で、自らを誉めたものは数少ないと思うが、「ひとりあそびぞわれはまされる」と詠んだあたりは、自らを愛おしみつつ、そんな自らを誉めてやりたいような気持ちなのであろうか。反面、吹き出したくなるほど面白くて可愛い。そして徐々に寂しく、悲しい想いになってくる。

形見とて何か残こさん春は花夏ほととぎす秋はもみぢ葉

これも、良寛の代表的な歌であるが、国上を去る時に詠んだ歌だという。

昔の60歳は、相当な老人である。五合庵では、生活が困難であると、周囲の親しい人は考えたのであろうが、乙子神社も厳しい立地条件であった。そこで良寛は、平地の木村家の薪小屋に引っ越すことになった。小さな庵を建てるから少し待ってもらいたいと言われたのを良寛は断って、薪小屋を改造してもらったという。いかにも良寛らしい。1826（文政9）年、良寛69歳のことであった。

## 7 貞心尼あらわる

良寛の最晩年に、思いもかけないことが起きる。40歳も年の差のある、若くて美しい尼僧・貞心尼が、良寛の前に現れたのである。

貞心尼は、1798（寛政10）年に生まれ、長岡藩士・奥村五兵衛の二女で幼名をマスといった。北魚沼郡小出嶋町の医師・関長温に嫁いだのは、17、8歳の時だと言う。5年程で離別したとも、夫と死別したともいわれているが、実家に帰ったのち、柏崎の洞雲寺で剃髪し尼になった。幼い頃から読書が好きな少女で、とくに古今集を愛読していたといわれる。

貞心尼は、柏崎にいても、良寛の噂は耳にしていたのだろう。きっといつか会いに行きたいと思っていたはずだ。

1827（文政10）年の夏、貞心尼は、良寛が木村家の薪小屋にいることを聞き、自作の手毬と次の歌をもって、はるばると訪ねていった。

これぞこの仏の道に遊びつつ突くや尽きせぬ御法なるらむ

あなたさまは、僧として仏の道にありつつ、手毬をついて遊んでいらっしやいますが、突いても突いても尽きないものが、その行為であり仏のみ教えだということなののでしょうか、と歌で尋ねたわけである。

貞心尼は、はるばると訪ねて行ったが、この時良寛は留守であった。良寛はこの頃、寺泊の密蔵院に入っていたので会えなかった。貞心尼は、木村家へ良寛宛の手紙と歌、そして手毬を託して、寂しく帰って行った。

そして来る日も来る日も、良寛からの手紙を待った。

やがて秋になり、良寛からの返歌が届いたのである。貞心尼は、嬉しくて嬉しくて、飛び上るほど喜こんだことであろう。届いたのは、前掲の「つきてみよひふみよいむなやここのとをととおさめてまたはじまるを」の歌である。「つきてみよ」

と、命令的に始まるこの歌は、相手に親しみをもち、優しく語りかけるように、仏のみ教えを詠み込んでいる。

曹洞宗宗祖・道元が、宋に渡った時教えられた「一、二、三」の数字の中に仏の教えがあるという。それは、「徧界曾って藏さず」（仏の教えは、大自然の中にある。どこにも隠されてはいないという意味）の世界ということだ。

良寛は、このようにやさしそうであって難解な歌を詠んでも、貞心尼はかならず理解できる尼僧であると、直感的に思っただけのことだに違いない。そして貞心尼も、良寛和尚はただものではない、子どもたちと手毬について無心に遊んでおられるが、あの方のなさることは、すべて仏の道に通じているに違いない、という思いだったのだろう。

人間のフィーリングとは、そういうものだ。同一方向を向いて、懸命に生きている者同士であってみれば、響きあうものをお互いに感じ取れるはずである。

それにしてもこの時代の女性の立場で、よくぞ貞心尼は、自分の方から良寛に急速に近寄ったものだ。女性だからというだけでなく、尊敬してやまないあこがれの人にここまで積極的になれるものであろうか。いや、それほどまでに貞心尼は、自己実現、求道心に真っ直ぐに向き合っていたということであろう。離婚（または死別か）をし、人生の方向を悩んでいた貞心尼には、良寛に学ぶ文学や宗教にどれほど思い焦がれていたかということだ。

はじめて訪ねて行って会えなかった貞心尼であったが、そのまま帰って来なかったところが、いかにも貞心尼らしいところである。「何かたにか御座なされ候やらん やがてまたあつき時は御かへり遊さるべくと存じ候へば とふぞそのみぎり参りたき物とぞんじまゐらせ候」と、どうしてもお会いしたいのだという思いを、木村家に残して帰ったのである。

返歌があればなおさらのこと、「会えるきっかけはつかめた！いつ行こうか」と、心は急いたに違いない。今日のように、携帯や電子メールを打てば、すぐにでも通じるような時代は、手紙が届くまで自分の心で幾度も反芻したり、待ちに待った手紙の届く嬉しさなど、どんなものか理解しきれないかもしれない。半年近くも待ち望んだ手紙は、若い貞心尼の心をずいぶんと熱くしたであろう。こうして貞心尼が、はじめて良寛に会ったのは、この年、1827（文政10）年の秋であった。

はじめて相見奉りて

君にかく相見ることのうれしさもまだ醒めやらぬ夢かとぞ思ふ

するとすぐに良寛は、返し歌を作った。

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまに

貞心尼は、なんと自由奔放な女性であったことか。会いたくて会いたくてならなかった人に、やっと会えた喜びをこんなにも素直に愛らしく、ためらうことなく詠い

あげている。

良寛和尚にこのようにお会いできましたことは、まだ醒めやらぬ夢のようでございます。夢ならばどうか醒めないでほしいと。すると良寛も高まる思いで、夢の世にまどろみながら夢をまた語る、でもそれは、「まにまに語ろうなあ」と、少し間をおいて、と言うくらいの気持ちであったろうか。しかし貞心尼は、「まにまに」ではだめなのです。夜を通して、教をを請いたいのです、とまた次の歌を返す。

向かひみて千代も八千代も見てしがな空行く月の事間はずとも

いいえ。私は良寛さまと向かいあって千代も八千代も語りあいたいのです。空を渡る月がどんなに西に傾いて朝が来ようとも、時間のことなど気にしないでください。お願いですから、このまま良寛さまのお側にいさせて下さい、と哀願したのであろう。

ここまで言われると、良寛も困ってしまった。思わぬ出会いに、心ときめかせながらも、年老いたわが身を考えると、余りに性急な若い尼僧の思いに答えかねることもある。

心さへ変わりざりせば這う鳶のたへず向かはむ千代も八千代も

良寛は、自分の心を抑えながらも、優しく貞心尼に歌で諭す。

心さえ変わらなかつたら、千代も八千代も向かいあっていられるのです。だからもうそろそろお休みなさい、と言う思いなのか。それでも貞心尼は、高まる思いを抑えようとはしない。

これはやはり相聞の歌でなくて何であろう。

これらの歌は、良寛没後、貞心尼と遍澄と言う良寛のただ一人の弟子の協力によりまとめられたと言う『蓮の露』に収められているものである。

良寛没後4年目、1835（天保6）年5月、貞心尼38歳の時完成したとされる。これは、良寛歌集最初のものであり、貞心尼自筆のものとなった。

『良寛と貞心尼』[加藤、1979：135-136]には、著者の加藤傳一氏が『蓮の露』全文を撮影したものが載せられている。江戸時代の三大女流歌人（加賀の千代女、京の蓮月尼と貞心尼）といわれた貞心尼は、小野道風の秋萩帖を学び、この書に長歌、旋頭歌、短歌を合わせて151首載せて、書を格調高いものにしている。

またこの書には、良寛、貞心尼の書について、二人の間には、テレパシーが電流のように流れて、脳波の波長のようなものが感じられる、というふうなことを述べている。そして、「良寛は貞心尼に会って、それまでの技巧の書から、愛情（情感）に満ちた、そして波長の高い、美しい書となって、完成していると思われます」[加藤、1979：135-136]という、鎌倉芳太郎氏の手紙文が載せられている。

加藤氏は、良寛と貞心尼は会う前から脳波の波長がよく似ていて、運命の糸で結ばれていたとでもいう二人の関係、と評している。そして貞心尼は秋萩帖を、一意

専心、「思い込んだら最後、恐ろしいまでに習いこんでいる」とまで言っている。

誰が評しても、貞心尼はこれだけの意気込みであるから、良寛に会いに行く時も、ただならぬ態度であったということは想像がつく。

良寛の歌も、万葉集も読んでいただけあって、流暢な詠みぶりはそこから来ていると思われる、谷川敏朗氏は『良寛百歌撰 良寛』[谷川、1979：頁数]の中で述べている。

新潟を訪れた時、長岡市の信濃川の堤防に、次のような貞心尼の歌碑が草にうずもれて立っていた。

夕さればもゆるおもひにたへかねてみぎはの草に蜚飛ぶらむ

蜚に自分の想いを重ねているのであろうか。

夕方になれば、あなたに対する燃えるような想いに耐えかねて、水際の草の近くを飛ぶのですよ、とでもいう意味だろうか。この歌は、この時はじめてふれた歌であったが、それは良寛に対する思いなのだろうか。それとも良寛の死後、貞心尼の前にこの歌を詠うほどの人が現れたということだろうか。いつごろ詠んだ歌なのだろうか。『良寛と貞心尼』などで答えを探してみたが、見当たらずに残念でならない。この歌に関しては、私の今後の研究課題としよう。

少し話はそれてしまうが、「研究」とはこのようなことを言うのであろう。

『良寛と貞心尼』に、撮影されて収められている「蓮の露」「焼野の一草」などの貞心尼の書いた文字を、著者の加藤氏は一字一字丁寧に読みくだき、その時の筆使いで、あらゆる角度から分析をし、書いた時の思いまでを読み取ろうとしている。

とくに貞心尼が一度書いた文字を訂正している筆跡を見て、自筆によるものか、後の人が直したのかどうか、また自分の撮影技術の影響はどうかと、隅々まで注意を払っている。そして一部を拡大して、墨の濃さ、薄さ、淡さを見て分析をし、誰の筆になるものかを観ている。研究とは、こういうものなのだ、あらためて思ったことである。

ところで貞心尼は、容姿の美しい人であったと、いろいろな本に書いてある。前にも述べたが、安田鞞彦画伯による良寛と貞心尼が、囲炉裏に對坐している絵では、良寛の日に焼けた顔か、貞心尼にはじめて会って紅潮した顔か、あるいは囲炉裏の火に頬が火照っているのか、だいたい色に染まった頬が描かれている他は、側にある行燈にほのかな色がついているくらいだ。後ろ向きの貞心尼の頭は白く、黒い衣だけがはっきりとしていて、いかにも美しく利発な尼僧であるだろうと連想させる。息をのむほどの清純さである。

一方、柏崎の極楽寺第28世住職・照阿上人が描いたとされる貞心尼の肖像画は、ガククリするほど、顔中皺だらけの老婆で、安田画伯の貞心尼の面影は微塵も見えない。この頃カメラなどなかったので何とも言い難いが、この肖像画は1872（明治5）年壬申の年2月26日の夜書かれたものだそう。『病中図』と書かれているように、この年の2月11日に没している、没後に描き終えたということであろう。



じっくり見れば、坐した姿が少し前かがみで苦しそうな様子である。口元を引き締めて、気丈な人のようにも見受けられることができる。

貞心尼の辞世の歌は、

くるに似てかへるに似たりおきつ波立居は風のふくにまかせて

である。

『蓮の露』の終章あたりで、貞心尼が「くるに似てかへるに似たりおきつ波」と上の句を詠んだのに対して、良寛が「あきらかりけりきみがことのは」と、下句を付けた1首が見える。貞心尼は、この歌の下句を「立居は風のふくにまかせて」と詠んで辞世の歌にしている。この歌は、臨終の前日の作であろうといわれている。最後まで良寛のことが念頭から離れなかったということだろう。

貞心尼は、良寛の庵を何度か訪ねているが、歌のやり取りはもちろんのこと、仏道を学んだり、生き方を語りあったりしたことであろう。

1830（天保1）年11月、良寛は激しい腹痛に襲われる。12月25日、良寛危篤の手紙を受け取った貞心尼は、島崎の良寛を訪ねる。雪の降る中、塩入坂という難所を越えて会いに行ったのだ。

あずさゆみ春になりなば草のいほをとく出て来ませあひたきものを

いついつと待ちにし人は来たりけり今はあひ見て何か思はむ

春になったら、あなたに会える。春になったら庵を出ていらっしゃいよ。とても会いたいから、と。

いつ会えるだろうか、いつ来るだろうかと待っていたあなたに、やっと会えた。こうして会えたのだから、もう何も思うことはありませんよと詠った、良寛のせつなる想いである。

良寛は、今でいう直腸癌だったのだろうと言われている。1831（天保2）年1月6日、弟の由之と貞心尼の見守る中、弟子の遍澄の膝の上で、やすらかに大往生を遂げた。74歳であった。貞心尼は良寛没後、40年間、仏の道に生きたのである。

## 8 エピローグ

死者1,600人、負傷者1,400人を超え、マグニチュード7にも及んだ三条地震は、1828（文政11）年のことであった。この時良寛は、友人の阿部定珍と山田杜皐に、見舞いの書簡を出している。定珍には、「先日大地震世間一同の大変に候 野僧草庵ハ何事もなく候 来春寛々御めにかけ申上度候 かしこ」というものであった。また杜皐宛には「地しんは信に大変に候 野僧草庵ハ何事なく親のい中死人もなくめで度候 しかし災難に逢時節には災難に逢がよく候 死ぬ時節には死ぬがよく候 是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ」というものであった。この二人の

手紙には、次の歌も添えられている。

うちつけに死なば死なずて永らえてかかる憂きめを見るがわびしさ

山田杜臯宛のものは、普通ではなかなか理解しがたい。杜臯とは、親戚でもあるが、やはり文学を通じての関係で、杜臯が訪ねてくると良寛は、話しに夢中になり、なかなか帰したがらなかったといわれている。「災難に逢時節には災難に逢がよく候」「死ぬ時節には死ぬがよく候」と、あえて災難に逢った人宛に書く手紙であろうかと疑いたくもなるが、言われてみればその通りなのだ。それしかないということだ。いかにも良寛らしい、自然のままを受け止めようとする境地での助言である。自然のままを受け入れることによって、心は穏やかに保てると、高い次元での心のありようを言ったものだ。

しかし、添えられた歌には、生きながらえてきたために、このようなひどい目に逢わなければならなかったことは何と辛いことであろうか、と詠う。良寛のこの心境は、被害に遭った民衆のつらさを思う慈悲の心であり、優しさからくる想いであったろう。

故郷に帰ってからの良寛は、いかに悠々自適に日々を送っていたかということは、子どもたちとの交わりで分かることであるが、実家を逃げるように出た身であるにもかかわらず、弟の由之やきょうだいは良寛のことを厄介者扱いなどしていない。反対に尊敬すらしていたようだ。そして、ところの有志である阿部定珍や山田杜臯は、ともに歌を交わし、文学を論ずる友人関係にある。

托鉢に出れば、いたるところで書を求められる。江戸の書家で亀田鵬齋は良寛の書を絶賛したという。このように乞喰坊主と言われながらも、良寛の周囲の人々には、親しまれ尊敬されていた存在であったということである。

良寛は、食べ物はその日食べる分だけあればよし、住む場所は国上五合庵で最小限の面積、おごらず高ぶらず、地位も名誉も望まなかった。円通寺の国仙和尚から「大愚」の称号をもらった良寛は、終世、「愚のごとく」生きたことは確かである。

しかし、隠遁生活からは、「信心の社会性」は生まれてはこない。封建的な教団の在り方に心では反発しながらも、闘おうとはしなかった。そして民衆とともにあろうとするが、その思いを結束させようともしなかった。「足引の山田の案山子汝さへも穂拾ふ鳥を守るてふものを」と、案山子でさえも落穂を拾いにくる鳥を追い払うために番をしているのに、私は世の人々のために何もできないわが身であることよ、と嘆いてはいるが、一步踏み出す勇氣は出せなかったのか。

開国をせざるをえない国内事情のなか、良寛は、混沌とした世相を身に感じながらも、所詮名主という立場に生まれたということから抜け出せなかったということか。権力に抵抗して民衆が越後や新潟で起こした打ちこわし、近世封建社会の行き詰まりは、反対に彼を奮い立たせることを阻んだということか。

良寛は、むろん「信心第一主義」で生きたのではなかったが、いまひとつ世の中の変革というところまでは、残念ながらいたらなかった。

現代に生きるわれわれが、この良寛の生きざまから何を学ぶか。物のあり余る時

代に生き、他人の思いに心しない人が多い中で、良寛の生きざまは、まったく奇異に感じられることであろう。しかし、なぜそれなのに多くの人が、いま、良寛に魅かれるのか。そう言えば、川端康成もノーベル賞受賞のとき、良寛の「裏をみせ表を見せて散るもみじ」を引用していた。

それは、日本人の心の故郷が、「良寛的」であるということなのではなからうか。この稿を書き終えるにあたり、はたと思ったことである。

#### 【参考文献】

芸術新聞社編1991、『季刊墨スペシャル第6号 良寛入門 その書と生きざまへの誘い』芸術新聞社。

磯部欣三1986、『良寛の母おのぶ』恒文社。

加藤偉一1979、『良寛と貞心尼』考古堂書店。

北川省一1983、『定本 良寛遊戯』東京白川書院。

北川省一1989、『良寛をめぐる女人たち』考古堂書店。

小森龍邦1986、『ころろ・文学・宗教』部落解放同盟広島県連合会。

小森龍邦1989、『道程 わが40年思索の遍歴』部落解放同盟広島県連合会出版部。

栗田 勇1984、『道元の読み方 今を生きる哲学 「正法眼蔵」』祥伝社。

栗田 勇1985、『良寛入門 もっと愚かに、もっと伸びやかに生きる道』祥伝社。

栗田勇他1989、『良寛さん』新潮社。

松岡正剛1993、『外は 良寛』芸術新聞社。

水上 勉1986a、『良寛を歩く』日本放送出版協会。

水上 勉1986b、『良寛』中公文庫。

宮 柊二1993、7-8、『コスモス』コスモス短歌会。

中村昭三1993、『良寛と貞心 その愛とところろ』考古堂書店。

新潟良寛会編1993、『[新潟良寛会 記念講演集] 良寛の魅力語る 第1・2集』考古堂書店。

大星光史1995、『風呂で読む良寛』世界思想社。

瀬戸内寂聴1991、『手毬』新潮社。

高橋郁丸2000、『まんが良寛を慕う 貞心尼物語〔蓮の露〕新装版』考古堂。

田村甚三郎1988、『良寛・その愛 貞心尼物語』文栄印刷。

田中和雄1995、『良寛さんのうた』童話屋。

田中圭一1986、『良寛』三一書房。

谷川敏朗1979、『良寛百歌撰 良寛』考古堂書店。

谷川敏朗1988、『良寛の書簡集』恒文社。

橘 馨1981、『良寛と仏道』考古堂書店。

上杉篤興1989、『良寛歌集 木端集』象山社。

上田三四二1984、『この世 この生—西行・良寛・明恵・道元—』新潮社。

芳賀幸四郎1966、『日本史要覧』文栄堂。

吉本隆明1992、『良寛』春秋社。

(ひらた みちこ・広島部落解放研究所宗教部会)